

次の文章を読んで、あとの問1から問6までの問いに答えなさい。

1 ぼく自身の初めての日本文化体験、日本語体験において、日本語の特徴を考えると、書き言葉は話し言葉の延長にすぎないという、多くの日本人がもっていた認識を、ぼく自身そのまま信じていたと思う。自分自身が日本語を書き出したとき、自分の書いたものが批評されたり、それに基づいて文学者たちと語ったり、という経験から、改めて話し言葉と書き言葉の違いを深く考えさせられるようになった。日本語を話したいということと日本語を書きたいという二つは、「A」つながってはいるのだが、本質的に違うということを、自分の心の中でも少しずつ分かるようになっていった。話し言葉にひかれるのと、書き言葉にひかれるのは、明確に違う。ではその違いは何か。日本語には漢字があり、平仮名があり、片仮名があり、現代ではローマ字もある。ぼくの文章には、中国の簡体字も入る。いわゆる「混じり文」だ。ぼくは「混じり文」にひかれて、書いたのだと思う。

2 プリンストン大学の恩師に、三島由紀夫や大江健三郎の翻訳で知られるジョン・ネイスンがいる。あるとき、アジア学会が行われたホテルのロビーで一緒になり、「日本語は美しい、フランス語など問題にならない」「本当にそのとおりだ」というやりとりがあった。「日本語は美しい」と言ったとき、ぼくが何をイメージしていたかという、縦

書きで、漢字、平仮名、片仮名の混じり文を、自分の目で読み、自分の手で書く、ということだった。名翻訳家との会話は、おのずと、「(2)は美しい」という話になった。

3 話し言葉の次元で、なぜ日本語にひかれたのかとたずねられても、答えられない。しかし、書き言葉の次元で同じことをきかれたら、よくよく考えると、言えることがひとつある。書き言葉としての日本語には緊張感がある。その緊張感は、英語にもフランス語にも中国語にもない。単に文字を書く、文字によって表現するということは、まったく別の次元のもので、しかも、かたちとして、きわめてよく見えるものでもある。

4 歴史的に見て、日本は固有の文字をもっていなかった。自分の言葉——「土着」の感性——を書くために、異質な文字——「舶来」の漢字——を使わなければならなかった。日本語を書く緊張感とは、文字の流入過程、つまり日本語の文字の歴史にいやおうなしに参加せざるをえなくなる、ということなのだ。だけれども、日本語を一行書いた瞬間に、そこに投げ込まれる。それは、中国人もアメリカ人もフランス人も、意識せずにすむ緊張感だ。このことは、ぼくがアメリカと日本の間だけを往還していた時代には、「B」見えるものではなかった。日本とアメリカ、あるいは日本と西洋という動きに加え、日本と中国大陸という、もうひとつの行き来があったときに初めて、はっきりと見えてきた。

5

ぼくは英語ならタイプを打つが、日本語のワープロは使わない。一度試みたことがあったが、「変換する」という行為が嫌だった。ローマ字か仮名で打ち込み、ボタンを押してその字句を選ぶ、そのことにすぐく引かかってしまう。自分で文章を書きながら、漢字か平仮名か片仮名かを、選ぶ。そこに日本語の、いい意味での不自然さが入っているとと思う。平仮名で書くのと漢字で書くのとでは、ずいぶん違う。しかしその使い分けができるところが、日本語の豊かさでもあると思う。選択という過程が常にある。文字のかたちそのもの、文字の種類を選ぶという選択は、決められ与えられた英語や中国語にはない。他の言語には、ボキャブラリーの選択があるだけだ。

6

中国人はよく日本人は神経質だと言う。しかし、それは国民性というものではないだろう。あらかじめ備わった国民性ではないのだが、日本語を書くとき、書き言葉のなかに異質なものがあ、異質なものを常に同化するという経験をする。それが、心のはたらきに影響しているのかもしれない。

(リービ英雄 わがこ『我的日本語 わがこThe World in Japanese』(1976))

(注)

○ 1 6 は段落符号である。

○ 簡体字Ⅱ中華人民共和国で公式に使われている、字体を簡略化した漢字。

○ 舶来Ⅱ外国から渡来すること。 ○ 往還Ⅱ往復。

○ タイプⅡタイプライターの略。

○ ボキャブラリーⅡここでは、単語のこと。